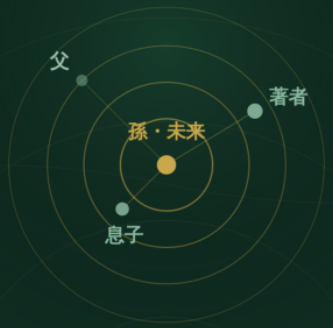
CAREER & LIFE DESIGN SERIES vol.1



じんせいのちず

人生の地図

―― 四世代への手紙 ――

100年を生きるための智慧
60歳の父から、34歳の息子へ、4歳の孫へ

時　代　進
キャリア＆ライフデザイン研究所

目次

序章　なぜ私はこの手紙を書くのか

３０歳のときの、一つの気づき

息子との、ある夜の会話

孫の問い

四世代の地図、それぞれの形

私たちの世代が、準備できていなかったこと

でも、気づいたなら、そこから始めればいい

この本が生まれた理由

この本の構成と読み方

三つの旅の記録として
第１の手紙　１００年の地図を描く

【息子へ】

父さんの失敗

四世代の人生設計は、こんなに違う

３４歳は、人生の３分の１にすぎない

各ステージで、何を育てるか

「今、何をすべきか」より「なぜ、どう生きるか」

父さんも今、地図を描いている

【孫へ、そして孫を育てる息子へ】

未来へ

人生はマラソン、かけっこじゃない

１００歳のお前を想像してみよう

おじいちゃんも、新しい冒険を始めるよ

お父さんへ――息子へ
第２の手紙　何のために生きるのか

【息子へ】

充実感は、パーパスじゃない

外側からの動機と、内側からの動機

３０歳の初志を、２８年間忘れていた

パーパスの見つけ方

パーパスは、変わっていい

副業は、パーパスを探す実験場

父さんの、６０歳からのパーパス

【孫へ、そして孫を育てる息子へ】

未来へ

「楽しい」が一番強い

「ありがとう」を集めよう

お父さんへ――息子へ
第３の手紙　自分の居場所を見つける

【息子へ】

会社は、借り物の居場所だ

業界を「５つの力」で見る

替えがきかない人材になる

副業という「もう一つの居場所」

父さんが見つけた、６０歳からの居場所

【未来へ、そして未来を育てる息子へ】

未来へ

学校だけが居場所じゃない

お前だけの「組み合わせ」を作ろう

お父さんへ――息子へ
第４の手紙　競争しない生き方

【息子へ】

終わらない競争

レッドオーシャンで消耗しない

掛け算の戦略――１万人に１人になる

会社では競争し、副業では創造する

一つに絞らない、分散する人生

父さんが選んだ、競争しない道

【未来へ、そして未来を育てる息子へ】

未来へ

一番じゃなくていい理由

得意の掛け算をしよう

お父さんへ――息子へ
第５の手紙　変化の波に乗る

【息子へ】

父さんが変化を怖がっていた話

「兆し」を感じ取る目のこと

早すぎず、遅すぎずのこと

ピボットについて

１０年後のことを、少しだけ

副業が「変化への準備」になるということ

【未来へ、そして未来を育てる息子へ】

未来へ

世界は、ずっと変わり続ける

計画は変えていい

お父さんへ——息子へ
第６の手紙　選択という技術

【息子へ】

追い詰められてから選んだ、父さんの経験

「オプション」という考え方

充実しているときに、次の種を蒔くこと

完璧な選択は、ない

どっちに転んでも得な選択のこと

選ばなかった２８年間のこと

【未来へ、そして未来を育てる息子へ】

未来へ

選ぶって、どういうこと

間違えても、大丈夫

お父さんへ――息子へ
第７の手紙　失敗との付き合い方

【息子へ】

父さんの世代が失敗を恐れた理由

打率より、打席数のこと

良質な失敗と、そうでない失敗

弱みを見せられる場所のこと

失敗が積み重なって、何かになっていく

【未来へ、そして未来を育てる息子へ】

未来へ

失敗は恥ずかしくない

困ったら、助けを求めよう

お父さんへ――息子へ
第８の手紙　学び続けるということ

【息子へ】

学びは、学校で終わらない

スキルの賞味期限のこと

上手い人を素直に真似ることについて

３０代、４０代、６０代の学びの違い

学びを止めないための、小さなこと

【未来へ、そして未来を育てる息子へ】

未来へ

勉強は、ずっと続く

わからないことは、質問しよう

お父さんへ――息子へ
第９の手紙　誰かのために生きる

【息子へ】

受け取るだけでは、満たされないこと

与える人と、受け取る人のこと

与える喜び、支える喜び

次世代への責任について

父さんが６０歳から始めたこと

【未来へ、そして未来を育てる息子へ】

未来へ

もらうより、あげる方が嬉しい

次の世代にバトンを渡す

お父さんへ――息子へ
終章　未来へのバトン

孫の問い、もう一度

息子へ、最後に

未来へ、最後に

四世代の地図、それぞれの形

バトンを渡す
本書を読んでくださった方へ

序章　なぜ私はこの手紙を書くのか

私は今、６０歳になった。

ちょうど６０歳になり、会社を定年退職した。約３８年間、一つの会社に勤め続けた。営業を、マーケティングを、戦略立案を。走り続けた３８年だった。

その終わりが、ついに来た。
でも、これは「終わり」ではない。

目の前には、まだ３０年、いや４０年近い人生が広がっている。
そして私は今、新しい「人生の地図」を描き始めているところだ。

３０歳のときの、一つの気づき

実は、私は３０歳のときに社会保険労務士の資格を取った。
当時、私はビジネスの世界で必死に働いていた。その中でふと、あることに気づいた。

「人こそが、最も重要な経営資源だ」

どんなに優れた戦略も、最新の技術も、立派な設備も、それを動かすのは結局、人だ。人が活きなければ、会社は動かない。
だから、人事労務の専門家になりたいと思った。勉強して、資格を取った。

でも、その後、私はビジネスに夢中になった。
営業の面白さに、マーケティングの奥深さに、戦略立案の興奮に。
気づけば、社労士の資格は引き出しの奥に眠ったまま、２８年が過

ぎていた。

そして、５８歳。
ふと、３０歳のときの自分を思い出した。

「人を支えたい」

今なら、できる。３８年のビジネス経験がある。人の痛みも、組織の難しさも、わかる。

だから、５８歳で社労士登録をして、活動を始めた。成年後見人として判断能力が衰えた方々の財産や権利を守る仕事にも、今まさに備えているところだ。

誰かの人生を支えることに、今の私はやりがいを感じている。
２８年、遠回りした。でも、この遠回りがあったから、今の私がいる。そう思いたい。

息子との、ある夜の会話

先日、久しぶりに実家に帰ってきた息子と、ゆっくり話をした。

息子は今、３４歳。大手企業でリーダーとして活躍しているらしい。部下もいて、プロジェクトも任されている。

「仕事は楽しい？」
そう聞くと、息子は少し考えてから答えた。
「うん、充実してる。責任もあるけど、やりがいもある。あ、それと、最近副業も始めたんだ」

副業。
父さんの時代には、ほとんど考えられなかった働き方だ。
「何をやってるんだ？」
「まあ、色々。会社では経験できないことを試してる」
息子は多くを語らなかった。でも、その目は生き生きしていた。新しい可能性を探している、そんな目だった。

会社ではリーダーとして。副業では挑戦者として。
二つの顔を持つ。それが、息子の世代の働き方なのだろう。

でも、その夜、布団の中で私は考えていた。
息子は、考えているだろうか。この先、４０年、５０年、７０年近い人生を。１００歳まで生きるかもしれない人生を。
今の会社は、その全てを支えてくれるのか。今のスキルは、その全てをカバーしてくれるのか。
今は順調だから、見えないものがある。
私自身、３０代、４０代はそうだった。順調なときほど、遠くが見えない。

孫の問い

そして、私には４歳の孫がいる。息子の息子だ。
この前、遊びに来たとき、孫がこんなことを聞いてきた。
「おじいちゃん、会社辞めたら、もう働かないの？」

私は笑って答えた。「そうだね、ゆっくりするよ」

でも、本当は違う。
私は、まだまだ働くつもりだ。年金だけでは暮らせないという現実

もある。でも、それ以上に、５８歳のときにようやく「本当にやりたいこと」が見えてきたのだ。

この子が大人になるころ、世界はどうなっているだろう。ＡＩは仕事をどう変えるだろう。今ある職業の半分は、もしかしたら消えているかもしれない。でも、新しい仕事もたくさん生まれているだろう。
孫は、１００歳まで生きるかもしれない。いや、１２０歳の可能性だってある。
そんな長い人生を、どう生きるのか。
４歳の孫には、まだわからない。でも、私は今から、この子に何かを伝えておきたいと思った。

四世代の地図、それぞれの形

私の父――息子から見れば祖父、孫から見ればひいおじいちゃんは、今８４歳で元気にしている。

彼は、商売人だった。

２０代前半で会社を起こし、必死に働いた。高度成長期だった。日本全体が右肩上がりで、商売をすれば、努力が必ず形になった。

父はいつも忙しかった。朝早くから夜遅くまで、休む日もなく働いていた。でも、文句を言わなかった。なぜなら、努力すればするほど、結果が出たからだ。

７４歳まで現役で働いた。定年なんて、なかった。自分の会社だから。

そして７０代で、自ら会社を締めた。

後継ぎが、いなかったからだ。
私が、会社員になってしまったから。

父は何も言わなかった。でも、今でも時々思う。
「父は、私に継いでほしかったのだろうか」
私は、父の商売を継がず、安定した会社員の道を選んだ。当時は、それが正しいと思った。父のように休みなく働くのは嫌だった。会社員なら、給料は安定し、週末は休める。

でも、今になって思う。
父は、本当に幸せだったのだろうか。そして、私の選択は、本当に正しかったのだろうか。

答えは、わからない。
ただ、一つだけ確かなことがある。
父の世代も、私の世代も、息子の世代も、それぞれが、その時代の「正解」を必死に探していた。そしてどの世代も、完全な正解にはたどり着けなかった。
それが、人生というものなのかもしれない。

私たちの世代が、準備できていなかったこと

なぜ、私はこの手紙を書くのか。
それは、５８歳のときにようやく気づいたことがあるからだ。

私の世代は、準備ができていなかった。

私たちは、父の世代――戦後の焼け野原から日本を再建した彼らの成功法則を信じて生きてきた。
「良い大学に入って、良い会社に入れば、あとは会社が面倒を見てくれる。６０歳で定年退職して、退職金と年金で、残りの人生を悠々自適に過ごせる」
それが、私たちが教えられた「正解」だった。

でも、その正解は、途中で変わった。

バブルが弾け、リストラの嵐が吹き、終身雇用は静かに崩壊した。私の同期の何人かは、５０代で会社を去った。そして６０歳で定年を迎えた私たちの目の前には、「まだ４０年」という、想定外の現実が広がっていた。

退職金は思ったより少ない。年金だけでは足りない。でも、体はまだ動く。頭もまだ働く。

これが、私たちの失敗だった。

６０歳以降の人生を、設計していなかった。いや、設計する必要があることすら、気づいていなかった。
　でも、気づいたなら、そこから始めればいい
６０歳の今、私は新しい地図を描き始めている。

社会保険労務士として、人々の年金や保険の相談に乗り、少しでも安心して暮らせる手助けをしたい。

成年後見人として判断能力が衰えた方々を支える日に備えて、準備を重ねている。そして、この本を書いている。

さらに、生成ＡＩという新しい技術とも向き合っている。６０歳で、新しいことを学んでいる。

６０歳は、終わりではない。新しい始まりだ。

遅すぎることは、ない。
そう、自分に言い聞かせながら、地図を描いている。

この本が生まれた理由

だから、私はこの手紙を書くことにした。
息子へ。孫へ。そして、孫を育てる息子へ。
私が伝えたいのは、「こうしろ」という答えではない。

なぜなら、私にも、息子や孫の時代の正解はわからないからだ。それに、私自身も今、地図の途中にいる。６０歳からの人生をどう生きるか、試行錯誤している。
だから、この手紙は「成功した人からのアドバイス」ではない。

道の途中にいる者同士の、「一緒に考えよう」という呼びかけだ。

この本の構成と読み方

この本は、９つの手紙で構成されている。

各章は「息子への手紙」と「孫へ、そして孫を育てる息子への手紙」の二部構成になっている。

息子へは、３４歳のお前の現状に寄り添いながら、人生１００年時代を生き抜くための戦略を一緒に考える。

孫へ、そして孫を育てる息子へは、まだ４歳の孫が小学生になったら読めるような優しい言葉で書きながら、同時に、息子が父親として孫を育てる際の指針も込めている。

この本の読み方は、自由だ。

３０代のあなたは、「息子への手紙」を読んでほしい。

５０〜６０代のあなたは、全体を通して読んでほしい。

子育て中のあなたは、「孫への手紙」をお子さんと一緒に読んでほしい。

小学生以上のあなたは、「孫への手紙」を読んでほしい。１０歳、１５歳、２０歳と読み返すたびに、新しい発見があるはずだ。

三つの旅の記録として

この本を書きながら、私自身も気づいたことがある。
この本は、三つの旅の記録でもある。

•息子の旅：３４歳からの６６年をどう生きるか
•孫の旅：４歳からの１１６年をどう生きるか
•私の旅：６０歳からの４０年をどう生きるか

私たちは、それぞれの地図を描きながら、時々立ち止まって、確認

し合う。
「今、どのあたりにいる？」「次は、どっちに行く？」「一緒に、ここまで来たね」
それが、世代を超えて生きるということだと、私は思う。

最後に、この本の基本姿勢を伝えたい。

過去のことは、私が語ろう。 上の世代がどう生きたか、何を残してくれたか。それを知れば、今の時代の特異性が見えてくる。

現在のことは、一緒に考えよう。 息子よ、お前の人生をどう設計するか。父さんも自分の人生をどう設計するか。一緒に考えさせてくれ。

未来のことは、お前に託そう。 孫よ、お前の時代をどう生きるか。それはお前が決めることだ。でも、おじいちゃんは、いつでもお前を応援している。

さあ、一緒に考えよう。
人生１００年時代を、どう生きるか。
私も、あなたも、それぞれの地図を描きながら。

２０２６年３月　時代進（じだいすすむ）

第１の手紙　１００年の地図を描く

人生の問い：なぜ人生に「設計図」が必要なのか？

【息子へ】

お前は今、３４歳だ。
リーダーとして部下を率いて、プロジェクトを任されて、副業でも新しいことに挑戦している。充実した毎日を送っているのだろう。
それは、本当に素晴らしいことだと思う。
でも、父さんは一つだけ、聞いてもいいか。

お前は、１００歳までの地図を持っているか？

父さんの失敗

６０歳になった今、父さんは一つのことを後悔している。
それは、「地図を描くのが遅すぎた」ということだ。

３８年間、会社員として走り続けた。３０代は夢中で働いた。４０代は管理職として忙しかった。５０代は「あと少し」と思いながら乗り切った。
そして６０歳。定年。

「さあ、これからどう生きる？」

そのとき初めて、父さんは気づいた。
目の前に、まだ３０年、いや４０年近い人生が広がっている。

でも、地図がない。

会社という「レール」の上を３８年間走ってきたから、レールがな

くなった瞬間、どこに向かえばいいかわからなくなった。退職金は思ったより少なかった。年金だけでは暮らせない。体はまだ動く。頭もまだ働く。でも、何をすればいいか、わからない。

これが、父さんの失敗だ。
６０歳になるまで、「６０歳以降の地図」を描いていなかった。

四世代の人生設計は、こんなに違う

お前のおじいちゃん――父さんの父――は、今８４歳で元気にしている。

彼は商売人だった。２０代前半に起業して、７４歳まで現役で働いた。その人生設計は、シンプルだった。

「働けるうちは働く。働けなくなったら引退する」
高度成長期の時代、それで十分だった。努力すれば結果が出た。商売をすれば利益が出た。
おじいちゃんの「人生の地図」は、一本道だった。

そして父さんの世代――１９６０年代生まれ――は、その一本道を信じて歩いた。「良い大学に入り、良い会社に入れば、６０歳まで会社が守ってくれる」。それが私たちの地図だった。

でも、その地図は６０歳で途切れていた。
６０歳から先のページが、白紙だった。

お前の世代は違う。

お前は最初から「会社は守ってくれない」ことを知っている。だから、会社員でありながら副業もする。一つに依存しない。複数の可能性を同時に持つ。
それは、正しい直感だ。

でも、父さんがもう一つ伝えたいのは、長さの問題だ。
３４歳のお前が１００歳まで生きるとすれば、まだ６６年ある。
おじいちゃんの人生全体より、長い。

３４歳は、人生の３分の１にすぎない

少し、計算をさせてくれ。
お前は今３４歳。
人生を１００年とすると、今はまだ3分の1が終わったところだ。
マラソンに例えるなら、１０キロ地点だ。４２.１９５キロのうち、まだ３２キロ以上残っている。
今が充実しているのは、素晴らしい。でも、マラソンの１０キロ地点で全力疾走していたら、どうなるか。
後半、必ず失速する。
人生も同じだ。
「３０代に全力を出すな」と言いたいわけじゃない。全力で走るのは大事だ。でも、「まだ６６年ある」という事実を頭の片隅に置きながら走ってほしい。

ペース配分が、必要だ。

各ステージで、何を育てるか

父さんは、ビジネスの世界で長年働いてきた。
企業が中長期の経営計画を立てるように、人生にも「ステージごとの戦略」が必要だと、今は思っている。

２０〜３０代：種を蒔く時期
スキルを身につける。人脈を作る。失敗しながら学ぶ。この時期の投資は、後から必ず返ってくる。お前は今この時期にいる。副業でいろんなことを試しているのも、種蒔きとして正しい。

４０〜５０代：刈り取りと、次の種蒔き
３０代に蒔いた種を収穫しながら、同時に次のステージの準備をする。この時期が一番忙しく、一番重要だ。「今は忙しいから後で」と言っていると、６０代になって後悔する。父さんがまさにそうだった。

６０〜７０代：新しい地図を描く
定年という「強制リセット」がある世代には、ここで新しい地図が必要になる。でも、お前の世代には定年という概念が薄い。だからこそ、自分で意識して「次の地図」を描かないと、漂流することになる。

８０〜９０代：統合と継承
今まで学んだこと、経験したことを次の世代に渡す時期。何を残すか、誰に渡すか。それを考えるために、今から準備が必要だ。
　「今、何をすべきか」より「なぜ、どう生きるか」
お前に覚えておいてほしいことがある。

地図を描くとは、「今日何をするか」を決めることではない。
「自分はどこに向かっているのか」「何のために生きているのか」「どんな人生だったと言いたいか」を、問い続けることだ。

会社は、お前に「今日何をするか」を与えてくれる。
でも、「なぜ生きるか」は、会社は与えてくれない。
副業をしているお前は、もう気づいているかもしれない。それは、地図を描く第一歩だ。

父さんも今、地図を描いている

正直に言う。

父さんも今、地図を描いている途中だ。
６０歳でようやく、社労士として人を支える仕事を始めた。成年後見人として判断能力が衰えた方々の財産や権利を守る活動にも、準備を重ねながら備えている。

正解があるわけじゃない。試行錯誤している。
だから父さんはお前に「こうしろ」とは言えない。
ただ一つだけ言えることは、地図は「余裕があるときに描く」ものだということだ。
追い詰められてから描こうとしても、遅い。
お前は今、充実している。順調だ。
だからこそ、今が地図を描くチャンスだ。
嵐が来る前に、羅針盤を手に入れておけ。

【孫へ、そして孫を育てる息子へ】

未来へ

おじいちゃんは今、６０歳になったよ。
お前は今４歳だね。

ねえ、一つ想像してみて。
お前がおじいちゃんと同じ６０歳になるのは、何年後だと思う？

計算してみようか。
６０から４を引くと、５６だ。
５６年後だよ。

２０８２年。
その頃、世界はどんな姿をしているだろう。車が空を飛んでいるかもしれない。今はまだないような仕事がたくさん生まれているかもしれない。逆に、今ある仕事のいくつかは、なくなっているかもしれない。

でもね、一つだけ確かなことがある。
お前の人生は、とっても長いということだ。
　人生はマラソン、かけっこじゃない
お前は、かけっこが好きかな？

かけっこは、短い距離を思いっきり走る。全力で、最初からダッシュする。

でも、マラソンは違う。
マラソンは、４２キロ以上を走る。最初から全力疾走したら、途中でへとへとになってしまう。上手なマラソン選手は、最初はゆっくり走って、体力を上手に使いながら走り続ける。

お前の人生は、かけっこじゃなくて、マラソンだよ。
１００年以上ある、長い長いマラソンだ。
だから、焦らなくていい。

マラソンは、スタートが少し遅くても、ゴールまで走り切れる人が勝ちだよ。

１００歳のお前を想像してみよう

ねえ、１００歳のお前を想像できるかな？

しわしわになって、白い髪の毛で、でも目はきらきらしていて。
どんなことをしているかな？どんな人たちと一緒にいるかな？
たまにでいいから、「将来の自分」を想像してみてほしい。

１０歳のお前。２０歳のお前。３０歳のお前。
どんな人になっていたいかな？
それが、お前だけの「人生の地図」の、最初のページになるよ。

おじいちゃんも、新しい冒険を始めるよ

実はね、おじいちゃんも今日から新しい冒険を始めるんだ。

４０年間、ずっと会社員だったおじいちゃんが、今日から新しい仕事を始める。困っている人の話を聞いて、一緒に解決策を考える仕事だ。

ドキドキしてる。うまくいくか、わからない。
でも、やってみないとわからないから、やってみる。
おじいちゃんも一緒に挑戦するよ。だから、お前も怖がらずに、やってみて。

お父さんへ――息子へ

最後に、孫の父親として読んでいるお前に伝えたい。

この子が「１００年の地図」を描けるかどうかは、３４歳のお前が

今、何を見せるかにかかっている。
説教しなくていい。「お前は将来こうしろ」と言わなくていい。
ただ、お前自身が地図を描いているところを、この子に見せてくれ。

父親が副業で新しいことに挑戦しているところを見て、子どもは「挑戦してもいいんだ」と学ぶ。父親が失敗して、でも立ち上がっているところを見て、子どもは「失敗しても大丈夫だ」と学ぶ。

おじいちゃんは、父さんの背中をあまり見せてあげられなかった。
仕事に追われて、お前と過ごす時間が少なかった。それが、今でも後悔している一つだ。

だから、お前には同じ失敗をしてほしくない。
この子の１００年の地図の、最初のページを、一緒に描いてやってくれ。

※ 次章：第２の手紙「何のために生きるのか」へ続く

第２の手紙　何のために生きるのか

人生の問い：お金や地位以外に、何を目指すのか？

【息子へ】

お前に、一つ聞いていいか。

お前は今、何のために働いているのか？
すぐに答えが浮かんだなら、それを大切にしてほしい。
もし少し考えてしまったなら、この手紙を読んでくれ。

充実感は、パーパスじゃない

お前は今、充実しているだろう。
リーダーとして、チームを率いる。プロジェクトを成功させる。部下が育つのを見る。評価される。昇進する。副業でも、新しいことに挑戦している。
これは、本物の充実感だと思う。軽くあしらいたくない。

でも、一つだけ、問いたいことがある。
それは、お前自身の「パーパス」か？
それとも、会社が用意した「やりがい」か？

会社が用意したやりがいは、会社にいる間しか続かない。プロジェクトが終われば消える。役職が変われば消える。退職すれば消える。

自分のパーパスは、どこにいても消えない。
父さんは、これに気づくのが、遅すぎた。

外側からの動機と、内側からの動機

動機には、二つの種類がある。

一つは、外から来る動機だ。給料、ボーナス、昇進、評価、他者からの承認。これらは強力で、人を動かす。でも、報酬がなくなれば、消える。

もう一つは、内から湧く動機だ。これが好きだ、これが楽しい、これをすると誰かが喜ぶ、これをしている自分でいたい。これは、報酬がなくても続く。

父さんは、３０代、４０代、５０代と、主に外から来る動機で動いてきた。
売上目標を達成したい。昇進したい。評価されたい。同期に負けたくない。
でも、５０代になったとき、ふと思ったことがある。
「これは、本当に自分のやりたいことだったのか？」

３０歳の初志を、２８年間忘れていた

父さんは３０歳のときに社会保険労務士の資格を取った。
そのとき確かに思ったんだ。

「人を支えたい」

でも、その後、会社のゲームが面白くなった。営業成績で競った。
プロジェクトの成功に夢中になった。
気づけば「人を支えたい」という初志を、完全に忘れていた。
２８年間、忘れていた。

５８歳のとき、ふと思い出した。

「あのとき、自分は何がしたかったんだっけ？」
そして、６０歳で社労士として動き始めた。成年後見人として判断能力が衰えた方々の権利を守る活動にも、今まさに備えているところだ。

お前に同じ遠回りをしてほしくない。
だから、今聞く。

お前のパーパスは、何か？

パーパスの見つけ方

「パーパスなんて、急に言われても」と思うかもしれない。
でも、ヒントはある。
三つの問いを、自分に投げかけてみてくれ。

一つ目。好きで、気づいたら没頭していることは何か？
疲れていても続けられること。誰かに頼まれなくてもやってしまうこと。時間を忘れること。そこに「内から湧く動機」の種がある。

二つ目。人より自然にうまくできることは何か？
「これは当たり前じゃないのか」と思っていることが、実は得意なことだったりする。

三つ目。誰の、どんな問題を解決したいか？
社会に目を向けてみたとき、「これはおかしい」「これをどうにかしたい」と思うことがあるはずだ。その怒りや、もどかしさの中に、パーパスが隠れていることがある。

この三つが重なる場所に、お前のパーパスがある。
「好き」×「得意」×「社会の求め」
それが、長続きする仕事の軸になる。

パーパスは、変わっていい

一つ、大事なことを伝えておく。

パーパスは、固定する必要はない。
２０代のパーパスと、４０代のパーパスが変わっても、それは「ブレ」じゃない。「成長」だ。
大切なのは、「今の自分のパーパスは何か」を、定期的に問い直すことだ。

年に一度でいい。誕生日でも、年始でも、何かの節目でも。
「今、自分は何のために働いているか」を、静かに自分に問いかけてみてくれ。

副業は、パーパスを探す実験場

お前は今、副業をしている。
副業とは「会社の外で、自分の選択で動く」ことだ。
会社の仕事には、上司の意向がある。組織の目標がある。評価の軸がある。
副業には、それがない。
何を選ぶか、どう動くか、どんな人と組むか。全部、自分で決める。
だから、副業は怖い。でも、だからこそ、自分のパーパスが試される場所でもある。

「本当に自分がやりたいことは何か」が、副業の中で見えてくるこ

とがある。
その「何か」を、大切にしてくれ。それが、お前のパーパスの種かもしれない。

父さんの、６０歳からのパーパス

参考までに、今の父さんのパーパスを話す。

「社会保障の恩恵を、届くべき人に届ける」
これだ。
日本には、知られていない制度が多すぎる。障害年金を受け取れる状態なのに、知らないまま苦しんでいる人がいる。
それを、少しでも変えたい。
そのためなら、地味な相談業務でも、根気のいる申請支援でも、続けられる。誰かの「ありがとう」が、給料の代わりになる。

これが、３０歳のときの初志と、２８年のビジネス経験が交わったところに生まれたパーパスだ。
遅すぎた。でも、今はある。
お前は、３４歳で、もうこの問いを持ち始めている。
それは、父さんより２６年、早い。

【孫へ、そして孫を育てる息子へ】

未来へ

ねえ、未来に聞くよ。
「なんで勉強するの？」って、思ったことある？

おじいちゃんも、子どものころ思ってた。
でも今は、少しわかる気がする。
勉強するのはね、「好きなことを見つけるため」なんだ。

「楽しい」が一番強い

お前は今、何が好きかな？
ブロックで遊ぶの？走るの？絵を描くの？

「楽しい！」「もっとやりたい！」と思うことを、大事にしてほしい。

なぜかというとね、「楽しい」と思いながらやることは、ずっと続けられるから。

お前が将来、「自分は何のために生きているのか」という答えは、「楽しい」の積み重ねの中にあると、おじいちゃんは思っている。

だから、「楽しい」を大切にしてね。

「ありがとう」を集めよう

もう一つ、おじいちゃんからのヒントをあげる。

誰かに「ありがとう」と言われたとき、どんな気持ちになるかな？嬉しいよね。
その「ありがとう」の気持ち、覚えておいてほしい。

おじいちゃんは今、困っている人のお手伝いをする仕事を始めたんだ。「ありがとう、あなたのおかげで助かりました」と言ってもらえると、どんな報酬よりも嬉しい気持ちになる。

お前がこれから生きていく中で、どんな「ありがとう」を集めたいか。それが、お前の生きる意味になるかもしれないよ。

お父さんへ——息子へ

最後に、孫の父親として読んでいるお前に一つ。

子どもに「何のために生きるのか」を教えるのは、親の言葉ではない。

親の姿だ。

お父さんが、楽しそうに仕事をしているところを見て、子どもは「仕事って楽しいものなんだ」と学ぶ。

お前が、自分のパーパスを持って、生き生きと動いていること。
それが、この子への最大の「何のために生きるのか」の答えになる。

ただ、お前自身が、楽しそうでいてくれ。
それだけで、この子には十分伝わる。

※ 次章：第３の手紙「自分の居場所を見つける」へ続く

第３の手紙　自分の居場所を見つける

人生の問い：どこで、誰と、何をして生きるのか？

【息子へ】
お前は今、「居場所」を持っている。
大手企業という立派な居場所だ。

リーダーとして認められ、仲間がいて、やるべき仕事があって、給料も安定している。
それは、本当に恵まれたことだ。
でも、父さんは一つだけ聞きたい。

その居場所は、永遠に続くだろうか。
会社は、借り物の居場所だ
父さんは、３８年間、会社という居場所にいた。

でも、定年になった瞬間、それが全部なくなった。
名刺がなくなった。肩書きがなくなった。毎朝行く場所がなくなった。「お前に頼みたい」と言ってくれる人がいなくなった。

その喪失感は、思っていた以上に大きかった。
会社員の多くが、定年後に「自分が何者かわからなくなる」と言う。それは、会社という居場所に自分のアイデンティティを預けすぎていたからだ。

会社は、会社が必要としている間だけ、居場所をくれる。
それは借り物の居場所だ。

借り物だから、いつか返さなければならない。

業界を「５つの力」で見る

お前の業界は、１０年後も同じ形をしているだろうか。
業界の競争環境を５つの力で読む考え方がある。
競合他社との戦い、新規参入の脅威、代替品の脅威、顧客の交渉力、サプライヤーの交渉力。

これは会社を見る目線だが、自分のキャリアにも使える。
お前が今いる会社、今いる業界は、この５つの力の中でどんな位置にあるか。
１０年後も、お前を必要としてくれるか。

替えがきかない人材になる

居場所を守るためには、「ここにいてほしい」と思われる存在になることが大切だ。

替えがきかない人材とは、特別な天才のことではない。
「この人でないとできない組み合わせ」を持っている人のことだ。

一つの分野で１００人に１人になることは、そこそこ努力すれば達成できる。でも、二つの分野でそれぞれ１００人に１人になれば、掛け算で１万人に１人になれる。

お前は今、大手企業でのリーダー経験と、副業での別分野の経験を積んでいる。
その掛け算が、お前だけの希少性を作る。

「会社員として〇〇ができて、副業で△△を経験していて、さらに

□□の知識がある人」

その希少性が、どこに行っても「いてほしい」と言われる理由になる。

副業という「もう一つの居場所」

お前が副業をしていることを、父さんは心から良いことだと思っている。

副業とは、会社以外に「自分が必要とされる場所」を持つということだ。

どちらかが揺れても、もう一方がある。その安心感は、見えないところで、お前の判断を自由にする。

「会社に嫌われたくない」という恐怖から動くのと、「どこに行っても自分には居場所がある」という自信から動くのとでは、同じ仕事をしていても、結果が違う。

父さんが見つけた、６０歳からの居場所

今の父さんには三つの居場所がある。

一つ目は、社労士として相談を受ける場所。二つ目は、成年後見人として動ける準備を整えている場所。三つ目は、この本を書くような、発信の場所。

三つとも、会社員時代にはなかった居場所だ。

お前は３４歳で、すでに二つ目の居場所を探し始めている。

居場所は、多ければ多いほど、人生は豊かになる。
居場所の複数化は、リスクヘッジであり、自由の確保でもある。

【未来へ、そして未来を育てる息子へ】

未来へ

未来は、今どこが好き？

おうち？保育園？公園？おじいちゃんの家？

きっと、いくつかある。
「好きな場所」があるということは、「自分がいていい場所」があるということだから。

学校だけが居場所じゃない

未来がもう少し大きくなったら、小学校に行く。中学校に行く。高校に行く。
でも、もし学校がつらくなったとしても、覚えていてほしいことがある。

学校だけが居場所じゃない。

「ここにいると、なんか落ち着く」「ここにいると、楽しい」「ここにいると、自分らしくいられる」という場所が、一つじゃなく、いくつもあるといい。
そういう場所を、少しずつ見つけていってほしい。

お前だけの「組み合わせ」を作ろう

おじいちゃんから、一つだけ秘密を教えるよ。

「誰かより上手」じゃなくても、「組み合わせがお前だけ」なら、

それで十分なんだ。

未来も、これから色んなことをやってみて、「これが好き」「これも好き」を少しずつ集めていってほしい。
その集まりが、未来だけの居場所を作ってくれるから。

お父さんへ――息子へ

この子の居場所を育てるために、お前にできることが一つある。

「ここにいていい」と言い続けること。

根っこが深い木は、嵐が来ても倒れない。
外でどんな風が吹いても、「家に帰ればいい」という場所があれば、この子は何度でも立ち上がれる。

「家族という居場所」は、お前が作り続けるものだ。
それが、この子への最大の贈り物になる。

※ 次章：第４の手紙「競争しない生き方」へ続く

第４の手紙　競争しない生き方

人生の問い：みんなと違う道を歩く勇気

【息子へ】

お前は今、競争に勝っている。
大手企業の中で、同期より早くリーダーになった。プロジェクトを任され、部下を率い、評価されている。副業でも、新しい挑戦を始めている。
それは、紛れもない「勝ち」だ。
でも、父さんはその「勝ち」を見ながら、少し心配している。

競争して勝っても、次の競争が待っている。

お前は、それをわかっているか。

終わらない競争

父さんは、３８年間、会社という競争の中にいた。
２０代は、同期との競争だった。３０代は、他部署との競争だった。４０代は、会社全体の競争だった。
５０代になっても、競争は終わらなかった。
そして６０歳で定年を迎えたとき、ふと気づいた。

競争に勝ち続けた先に、何があったのか。

思ったほど、何もなかった。
ゴールのないマラソンを走り続けていた、という感覚だ。

レッドオーシャンで消耗しない

ビジネスに「ブルーオーシャン戦略」という考え方がある。

競争が激しく、血で血を洗うような市場を「レッドオーシャン（赤い海）」と呼ぶ。

一方、競争のない、まだ誰も開拓していない市場を「ブルーオーシャン（青い海）」と呼ぶ。そこでは、比べられる相手がいない。自分だけのルールで動ける。

大手企業の中は、典型的なレッドオーシャンだ。
勝ち続けるためには、常に消耗し続けなければならない。

ならば、ブルーオーシャンを探せないか。
誰も気づいていない場所。自分だけの強みが活きる場所。競争ではなく、創造で動ける場所。

副業は、まさにそのブルーオーシャンを探す行為だと、父さんは思っている。

掛け算の戦略――1万人に1人になる

「競争しない生き方」の核心は、掛け算の戦略だ。

一つの分野で１００人に１人になることは、本気で３年取り組めば、多くの分野でそのレベルには届く。
その「１００人に１人」を、二つ掛け合わせると、１万人に１人になる。
三つ掛け合わせると、１００万人に１人だ。

お前は今、大手企業でのリーダー経験と、副業で積んでいる経験がある。

その掛け算が、お前だけのものになる。
これが、競争しない生き方の正体だ。

同じ土俵で戦わない。自分だけの土俵を作る。

会社では競争し、副業では創造する

父さんは「競争するな」と言いたいわけじゃない。
会社の中での競争は、必要だ。

ただ、人生の全てを競争に捧げるな、と言いたい。
会社では競争する。でも、副業では創造する。
競争は疲れる。創造は楽しい。

両方を持っている人が、結果的に一番強い。

一つに絞らない、分散する人生

「卵を一つのカゴに盛るな」という言葉がある。

一つに全てをつぎ込むのは危険だ。だから、複数のカゴに分けて持つ。投資の世界では、当たり前とされる考え方だ。

人生も、同じだと父さんは思っている。
お前の世代は、最初から「分散」することを知っている。
会社員でありながら、副業もある。スキルも一つじゃない。人脈も、会社の外にある。
それが、お前の強さだ。
お前は、そのことをすでに実践している。

父さんが選んだ、競争しない道

６０歳になって、父さんは競争のない場所に移った。

社労士として、困っている人を支える仕事だ。
ここには、競争相手がいない。なぜなら、目の前にいる人は、競争する相手ではなく、支援する相手だからだ。

困っている人の力になれたとき、「ありがとう」という言葉が返ってくる。
その「ありがとう」に、順位はない。競争もない。
３８年間、競争の中にいた父さんが、ようやくたどり着いた場所だ。

会社で競争し、副業で創造し、そしてどこかで「ありがとう」を受け取る場所を作ってくれ。

【未来へ、そして未来を育てる息子へ】

未来へ

未来は、かけっこで一番になりたいと思うことある？
でも、一つだけ教えていい？

１番じゃなくても、大丈夫なんだ。

一番じゃなくていい理由

世界中を見渡してみると、「一番」は一人しかなれない。
残りの２９人は、どうすればいいんだろう。

おじいちゃんの答えはね、「自分だけの組み合わせ」を作ることだよ。

１番じゃなくていい。未来らしければ、それでいい。

得意の掛け算をしよう

算数で習うかな、まだかな。
「かけ算」って知ってる？

自分の好きなことや得意なことも、掛け合わせることができるんだよ。
サッカーが好きで、絵を描くのも好きだとする。
サッカーが好きで、絵も描ける子は、ぐっと少なくなる。
そういう子が大きくなったら、サッカーの絵本を作れるかもしれない。

未来も、好きなことをたくさん見つけて、それを掛け合わせていってね。
　お父さんへ――息子へ
子どもは、親が「競争しろ」と言うより、親が楽しそうに自分の道を歩いているところを見て育つ。

お前が副業で自分だけの道を切り開いているところ。競争じゃなく、創造で動いているところ。
それを未来に見せてくれ。

「競争しなくていい場所がある」と知っている子どもは、強い。
なぜなら、追い詰められたとき、「ここじゃない場所に行けばいい」と思えるから。

その自由を、未来に渡してやってくれ。

※ 次章：第 5 の手紙「変化の波に乗る」へ続く

第 5 の手紙　変化の波に乗る

人生の問い：時代の変化を、どう味方につけるか？

【息子へ】

お前は今、変化の真っ只中にいる。
副業を始めた。会社の外に出て、別のフィールドに足を踏み入れた。新しいことを試している。
でも、父さんは一つだけ聞きたい。

お前にとって、変化は「怖いもの」か、それとも「面白いもの」か。

どちらが正しいわけじゃない。
ただ、その感覚の違いが、１０年後、２０年後の景色を、かなり変えると父さんは思っている。

父さんが変化を怖がっていた話

正直に言う。

父さんは長い間、変化が怖かった。
「今のやり方で、ずっとやってきた。なぜ変える必要がある？」
新しいシステムが入れば「また覚えることが増える」と感じた。業界のルールが変わりそうだと聞けば「様子を見よう」と後退した。
そして５８歳のとき、生成ＡＩというものに初めて触れた。

最初の正直な気持ちは、拒否反応だった。
「こんなもの、自分には関係ない」「どうせ使いこなせない」「もうすぐ定年なのに、今さら」
でも、ある日、ほんの少しだけ触ってみた。

驚いた。
今まで３時間かかっていた文書作成が、３０分でできた。

変化は、敵ではなかった。

使い方を知らなかった自分が、勝手に怖がっていただけだった。

「兆し」を感じ取る目のこと

変化に強い人を見ていると、一つ共通することがある。
大きな波が来る前の、小さな兆しを早めに感じ取っている。

１０年前のことを思い出してみてほしい。
スマートフォンが広まり始めたころ、多くの人は「写真を撮る道具」だと思っていた。でも、一部の人は「これはビジネスのすべてのインフラになる」と気づいていた。
今、同じようなことが起きていると、父さんは感じている。

生成ＡＩという波が来ている。
今はまだ「便利なツール」に見える。でも５年後、１０年後には、当たり前のインフラになっているかもしれない。

お前は、この兆しをどう感じているだろうか。

早すぎず、遅すぎずのこと

新しい技術が社会に広まるとき、人は大きく分けて五つの波で動く。

最初から飛びつく人たち。少し様子を見てから早めに動く人たち。

大勢が使い始めてから動く人たち。そして最後まで抵抗し続ける人たち。

父さんは、長い間、最後まで抵抗する側にいた。
ちょうどいいのは、「少し様子を見てから、早めに動く」立ち位置だと、父さんは思っている。

「これは来る」という手応えを感じたら、大勢より少し早く動いてみる。完璧を待たない。使いながら覚える。

お前が副業を始めたのは、まさにそういう動き方だと思う。

ピボットについて

スタートアップの世界に、「ピボット」という言葉がある。

最初に立てた仮説が違うとわかったとき、引き返すのではなく、方向転換することだ。

最初の仮説が間違っていたことに気づいた、ということは、正しい方向に学んだということだ。

お前が副業で試してみて、「これは違うな」と感じたとき、方向を変えていいと思う。
ただ、できれば一つだけ確認してほしいことがある。
「なぜ変えるのか」を、自分なりに言葉にできているか、ということだ。

「うまくいかなかったから」という理由と、「やってみてわかった

から、こっちに行きたい」という理由は、外から見ると似ているが、内側が違う。後者のピボットは、積み上がっていく。

１０年後のことを、少しだけ

次の１０年、生成ＡＩがもたらす変化は、それ以上かもしれないと感じている。

定型的なレポート作成、データ分析、初歩的な法律の調べもの、翻訳――これらはすでに、ＡＩが代替し始めている。

父さんが思うのは、ＡＩが最も苦手なのは、複雑な文脈を読み、人と人の間に立ち、判断の責任を負うことではないか、ということだ。

お前がリーダーとして積んでいる経験――チームを動かし、状況を判断し、人の気持ちに寄り添う力――は、そういう場所にある。

今のうちに、その方向をもう少し意識して深めていけないだろうか。

副業が「変化への準備」になるということ

副業とは、収入の多様化というだけではなく、変化への適応力を育てる場だと思っているからだ。

会社の中だけにいると、変化への対応は、組織が吸収してくれる部分が多い。
でも副業は、自分一人で変化と向き合う場所だ。

父さんは５８歳で生成ＡＩを使い始めた。最初は本当に戸惑った。

それでも使い続けたら、少しずつ使えるようになってきた。
５８歳から始めても、変われる。そう気づいたのは、最近のことだ。

３４歳のお前には、変わるための時間が、山ほどある。

◆◆◆

８４歳の父――お前の祖父――が商売をしていたころのことを、ふと思い出す。

あの人は、変化に敏感な人だった。
高度成長期の終わり、オイルショックが来たとき、業界全体が萎縮する中で、素早く商品のラインを切り替えた。バブルが崩壊したとき、大きなダメージを受けなかったのは、そのおかげだったと後から知った。

変化は、来る。
来ることを知っていた人が、波を味方にできた。
そのことを、父さんは少し遅れて学んだ。

【未来へ、そして未来を育てる息子へ】

未来へ

未来は、新しいこと、好き？

新しいおもちゃ。初めて行く公園。会ったことのないお友達。
最初はちょっとドキドキするけど、やってみたら楽しかった――そんな経験、あるかな？

おじいちゃんはね、それと同じことが、大人になってもあると思っている。

世界は、ずっと変わり続ける

おじいちゃんが子どもだったころは、地図は本屋さんで買うものだった。音楽は、レコードというぐるぐる回る丸いものから聞いていた。友達への連絡は、家の電話でしていた。

全部、変わった。

未来が大きくなるころには、また全部変わっているかもしれない。
でも、それは怖いことじゃないよ。

変わることは、もっと面白くなるってことだから。

計画は変えていい

未来に、一つ大事なことを伝えたい。

「こうしよう」と決めたことが、変わっても大丈夫なんだ。
おじいちゃんも、３０歳のときに「こんな仕事をしよう」と決めたのに、６０歳で全然違う仕事をしている。
遠回りしたけど、今の方が楽しいと思っている。

計画は、変えていいんだよ。

お父さんへ――息子へ

この子に変化への強さを育てるために、お前ができることが一つある。

新しいことを試している姿を、この子に見せてあげてほしい。

「お父さんも、これ初めてやってみた」「うまくいかなかったけど、またやってみる」
そんな言葉が日常の中にあるだけで、この子の中に「変化は怖くない、試せばいい」という感覚が育っていく。

完璧な大人を見せなくていい。
失敗しながら前に進む大人を、見せてくれれば十分だ。

おじいちゃんが５８歳でようやく身につけたことを、未来は４歳から自然に学んでいける。
それが、世代をまたいで積み重なることの意味だと、父さんは感じている。

※ 次章：第６の手紙「選択という技術」へ続く

第 6 の手紙　選択という技術

人生の問い：人生の分岐点で、どう決断するか？

【息子へ】

お前は今、選ばなくていい状態にある。
会社員として安定している。副業でも動いている。どちらかに絞る必要も、今のところない。
それは、実は最高の状態だと、父さんは思っている。

追い詰められてから選んだ、父さんの経験

父さんは、会社員生活の中で何度か大きな選択を迫られた。

４０代半ば、組織再編があった。５０代後半、担当部署が縮小した。
どちらも、余裕のない状態での選択だった。
追い詰められた状態での選択は、「今の状況から逃げるための選択」になりやすい。

本当に行きたい方向に進む選択ではなく、今いる場所から離れたいという気持ちから選んでしまう。
選んだようで、選ばされているに近い、という感覚だった。

「オプション」という考え方

金融の世界に、「オプション」という概念がある。

将来、ある資産を「買う権利」または「売る権利」を、あらかじめ持っておくことだ。
どちらの方向にも動ける状態を、意図的に保っておく。

お前が今、会社員と副業の両方をやっているのは、まさにオプションを持っている状態だ。
「全部やれる状態を保つこと」が、今のお前の強みだ。

充実しているときに、次の種を蒔くこと

充実しているときに、次の選択肢の準備ができる。
苦しいときに準備しようとしても、なかなかできない。

父さんが３０歳で社労士の資格を取ったのも、充実していたからだ。
その後２８年間、使わなかった。でも、５８歳でその「オプション」が生きた。
社労士という資格が、会社員を退いた後の「もう一つの道」になった。

お前は今、充実している。
その充実の中で、１０年後、２０年後に使えるかもしれない何かを、少しずつ積んでいけないだろうか。

完璧な選択は、ない

どんな選択も、完璧ではない。

何かを選ぶということは、何かを諦めるということでもある。
問題は、後悔そのものではないと父さんは思う。
後悔したときに、選び直せる余地を残しているかどうか、だ。

選択そのものを完璧にしようとするより、選択した後に修正できる余地を設計に組み込んでおく方が、長い目で見て大事かもしれない。

どっちに転んでも得な選択のこと

「どちらに転んでも、何かを得られる選択」を探す。

３０歳での社労士資格取得が、その一例だった。
合格して資格が活きれば、専門家としての道が開ける。合格しなくても、人事労務に関する知識が、会社員としての仕事に活きる。

どちらに転んでも、何かを得る。

「正しい選択を一発で当てよう」とするより、「どちらに転んでも学べる選択を繰り返していく」方が、長い人生では強いと、父さんは思っている。

選ばなかった２８年間のこと

３０代から５０代の父さんは、ある意味で「選ぶ」ことを避け続けた。
リスクが怖かったからだ。

でも、今になってわかることがある。
選ばないことも、一つの選択だ。
そして、選ばなかった２８年間、「本当にやりたいこと」への距離は、縮まらなかった。

流されて選ばないのと、意識して選ばないのとでは、５年後、１０年後の景色が、じわじわと変わってくると思うから。

◆◆◆

おじいちゃん――父さんの父――は、２０代前半で「起業する」という選択をした。

あの人は、自分で選んだ。
流されてではなく、覚悟を持って選んだ。だから、苦しいときも続けられた。

自分で選んだ道は、苦しくても「自分のことだ」と思える。それが、続ける力になる。
お前が選ぶものが、どんな選択であれ。

自分で選んだ、という感覚だけは、失わないでいてほしい。

【未来へ、そして未来を育てる息子へ】

未来へ

未来は、今日のおやつ、どれにするか、選んだことある？

実はね、「選ぶ」って、大人になっても難しいんだよ。
おじいちゃんも、６０年生きてきて、いまだにむずかしいと思っている。

選ぶって、どういうこと

選ぶということは、「これにする」と同時に、「あれはやめる」ということだからだよ。

大人になっても、これは変わらない。
でも、それでいいと思う。
全部を同時に選べないから、「自分が選んだもの」が大事になるん

だよ。

　間違えても、大丈夫

選択を間違えても、大丈夫なんだ。

一回選んで、「違ったな」と思ったら、選び直せばいい。

おじいちゃんは、３０歳のときに「こんな仕事をしよう」と思って資格を取った。でも、その後ずっと別の仕事をしていた。６０歳になって、やっとその資格を使い始めた。
３０年かかったけど、選び直した。

選び直すのに、遅すぎることはないよ。

　お父さんへ――息子へ

この子に「選ぶ力」を育てるために、お前ができることがある。

小さな選択を、この子にさせてあげること。

「今日の服、どっちにする？」「晩ごはん、何が食べたい？」
そして、この子が選んだあと、その選択を尊重してやってほしい。
自分で選んで、結果を経験する。それが、次の選択力を育てる。

親の仕事は、完璧な選択をさせることじゃなくて、選ぶことを恐れない子を育てることだと、父さんは思っている。

※ 次章：第７の手紙「失敗との付き合い方」へ続く

第７の手紙　失敗との付き合い方

人生の問い：失敗を恐れずに、どう挑戦し続けるか？

【息子へ】

お前に、少し恥ずかしい話をする。

父さんは、失敗が怖かった。
ずっと、怖かった。
会社員として３８年間、「失敗しないこと」に、相当なエネルギーを使っていた。
その結果、大きな失敗はしなかった。
でも、大きな挑戦も、しなかった。
６０歳になった今、そのことを少し後悔している。

父さんの世代が失敗を恐れた理由

父さんの時代、会社の中で失敗は「恥」だった。
ミスをすれば、評価が下がる。評価が下がれば、昇進が遠のく。
だから、みんな失敗しないように動いた。

新しいことを提案するより、今あるやり方を守る。目立つより、埋もれる。挑戦するより、確実な仕事をこなす。
それが、賢い生き方だと、どこかで思っていた。

でも、今になって思う。
失敗を避け続けた結果、何を守ったのだろう、と。

打率より、打席数のこと

人生を野球に例えるなら、大事なのは「打率」ではなく「打席数」

だ、という考え方がある。

打率４割の選手が年間５０打席しか立たなければ、ヒット数は２０本だ。
打率２割の選手が年間２００打席立てば、ヒット数は４０本になる
結果を出しているのは、打席に多く立った方だ。

父さんは、打席に立つことを、ずいぶん避けてきた。
お前は今、副業という形で新しい打席に立っている。
それは、父さんには眩しく見える。

良質な失敗と、そうでない失敗

同じ失敗を何度も繰り返すのは、学びではなく、ただの消耗だ。
父さんが思う「良質な失敗」には、共通点がある。

一つは、自分で選んで踏み出した先での失敗だ。
自分で選んで踏み出したことが失敗したとき、初めて「なぜ失敗したのか」を本当に考えられる。

もう一つは、失敗の後に、自分なりの答えを出した失敗だ。

「なぜうまくいかなかったのか」「次は何を変えるか」を、自分なりに言葉にしてみる。それだけで、失敗は経験になる。

弱みを見せられる場所のこと

父さんが３８年間の会社員生活で、最も難しかったことの一つが、弱みを見せることだった。

「わからない」「できない」「助けてほしい」

この言葉を口にすることが、どこか怖かった。

でも、６０歳になって、社労士として全く新しい仕事を始めてみて、思い知った。
わからないことが、山ほどある。一人では、とてもできない。
「これはどうすればいいですか」「教えてもらえますか」
言えたとき、思いがけず人がいろんなことを教えてくれた。

弱みを見せることが、つながりを作ることもある。
「助けてほしい」と言えることは、弱さではなく、一つの力だと、今は思っている。
　失敗が積み重なって、何かになっていく
過去の失敗が、ずいぶん後になって意味を持つことがある、ということだ。

３０歳のとき、「人を支えたい」という気持ちで社労士の資格を取ったが、その後すぐには使えなかった。でも、その２８年間の経験が、６０歳で社労士として動き始めたとき、相談者の状況を理解する力になっていた。

失敗は、すぐには意味を持たないことがある。
でも、捨てなければ、いつか形を変えて返ってくることがある。

◆◆◆

おじいちゃん――父さんの父――は、商売の中で何度か大きな失敗をした。

でも、あの人はそのたびに、また動いた。

「うまくいかなかった、ならどうするか」という感覚の方が強かった、と後から聞いた。

失敗を、終わりと思わなかった、ということだ。
父さんは、あの人のそういう部分を、もっと受け継いでおけばよかったと、今は思う。

【未来へ、そして未来を育てる息子へ】

未来へ

未来は、転んだことある？

お外で走っていて、つまずいて、ひざをすりむいて。
泣いたよね。痛かったよね。
でも、しばらくしたら、また走ってた。

それでいいんだよ。
転ぶことは、走っている証拠だから。

失敗は恥ずかしくない

まちがえるのは、やってみた証拠。

やってみなければ、まちがえることもない。
でも、やってみなければ、できるようになることもない。

まちがえることは、恥ずかしいことじゃないよ。

困ったら、助けを求めよう

困ったときは、助けを求めていい。

「助けてください」と言える人は、強い人だよ。

なぜかというとね、「助けてください」と言えると、助けてくれる人が現れるから。

おじいちゃんも、新しい仕事を始めて、毎日いろんな人に「教えてください」と言っている。６０歳になっても、そうしている。

未来も、困ったときは、お父さんに、先生に、お友達に、「助けて」と言っていい。

それを言えることが、未来の強さになるから。

お父さんへ――息子へ

この子が失敗したとき、お前がどう反応するかが、この子の「失敗との付き合い方」を作っていく。

「なんでこんなこともできないんだ」という言葉は、この子の中に「失敗は恥ずかしいこと」という感覚を育てる。

「やってみたんだね。どうだった？」という言葉は、この子の中に「失敗は次への材料」という感覚を育てる。

結果を見るのではなく、挑戦したことを見てやってほしい。
この子が何かに失敗したとき、その子のそばにいてやってくれ。
「また立てばいい」という空気を、作ってやってくれ。
それが、この子の１１６年を、どんな失敗にも折れない強さで支えることになると、おじいちゃんは信じている。

※ 次章：第 8 の手紙「学び続けるということ」へ続く

第 8 の手紙　学び続けるということ

人生の問い：１００年を生き抜く学び方とは？

【息子へ】

父さんは今、勉強している。

６０歳になって、また勉強している。

生成ＡＩの使い方を。社労士業務の細かい制度を。成年後見の法律を。そして、この本を書くための文章の作り方を。

最初はひどく戸惑った。

「この年になって、また一から覚えるのか」という感覚があった。

でも、続けていると、少しずつわかってくることがある。

そのとき、子どものころに感じていた「わかった！」という感覚が、６０歳の自分にも、まだあることに気づく。

その感覚が、思いがけず嬉しかった。

学びは、学校で終わらない

父さんの世代には、「学ぶのは若いうちだ」という空気があった。

会社の中では、学ぶより「できる人間を演じること」の方が大事になっていった、という感覚もある。

「こんなことも知らないのか」と思われたくないから、知ったふりをする。

その結果、「わかったふりをしている領域」が、少しずつ積み上がっていった。

学びをどこかで止めてしまうと、そういうことが起きる。

スキルの賞味期限のこと

かつては、一つのスキルを身につければ、長く使えた。

でも今は、違う。

テクノロジーが変わる。業界の構造が変わる。市場が変わる。

スキルには、賞味期限がある。
「学び続ける」というのは、何か大げさなことではない。
「自分のスキルの賞味期限を、意識する」ということだ。

今持っているスキルは、5年後もそのままで通用するか。少し変化させる必要があるとしたら、どの方向か。
そういうことを、定期的に自分に問いかけておく。それだけでも、大きく変わってくると思う。

上手い人を素直に真似ることについて

もう一つ、父さんが大事にしてきたことがある。
「上手い人を、素直に真似る」ということだ。

武道や伝統芸能の世界では、「守・破・離」という言葉がある。
まず師匠の型を「守」る。型を身につけたら、少しずつ「破」って自分なりにアレンジする。最終的に型から「離」れて、自分だけのやり方を作る。

お前は今、副業でも新しいことを試している。
うまくやっている人のやり方を、まず素直に真似てみることを、父さんは勧めたい。

「自分らしさ」は、型を身につけた後で、自然と出てくるものだと思うから。

３０代、４０代、６０代の学びの違い

３０代の学びは、広げる学びだと思っている。

自分がどんな分野に向いているか、まだわかっていない部分がある。だから、いろんなことを試す。読む。聞く。やってみる。
お前が副業でいろんなことを試しているのは、まさにその学びだと思う。

４０代の学びは、深める学びになると思っている。

広げてきたものの中から、「これで行く」というものが見えてくる。そこを、意識的に深める。専門性を作る。

６０代の学びは、父さんにとって、つなぐ学びだ。

それまでに積み上げたものを、目の前の人に届ける形に変えていく。
お前は今、３０代の「広げる学び」の真っ只中にいる。
そこで焦らず、たくさんのことに触れてほしいと、父さんは思っている。

学びを止めないための、小さなこと

毎日、少しだけ「知らないことに触れる」時間を作っている。

本でもいい。記事でもいい。誰かの話でもいい。
「これは知らなかった」「面白い」「なるほど」という感覚を、一

日に一回は持てるようにしている。
お前も、忙しい日々の中に、そういう小さな時間を作ってみてほしい。

通勤の電車の中で読む本一冊。副業で出会った人の話。ふと気になったことを少し調べてみること。
そういう小さなことが、１００年を生き抜く「学びの筋肉」になっていくと、父さんは思っている。

◆◆◆

おじいちゃん――父さんの父――は、８４歳になった今も、新聞を毎朝読んでいる。

商売をやめてから十数年経つが、「世の中を知ろう」という姿勢は変わらない。
「知ることをやめたら、老いる」と、あの人は言っていた。

学ぶことは、生きていることと、どこかつながっているのかもしれない。

【未来へ、そして未来を育てる息子へ】

未来へ

未来は、今、どんな勉強をしているかな。

実はね、おじいちゃんも今、勉強しているんだ。
６０歳になっても、まだ勉強してる。

びっくりした？

勉強は、ずっと続く

おじいちゃんの答えはね、「ずっと続く」だよ。

でも、ちょっと待って。
それは、いやなことじゃない。
勉強って、「知らなかったことが、わかる」ことだから。

「わかった！」って思う瞬間、あるよね。
あの気持ちが、勉強の本当の楽しさだよ。

わからないことは、質問しよう

わからないことがあったら、質問してほしい。

「わからない」という気持ちを大事にしてほしい。
その「わからない」が、学びの始まりだから。

おじいちゃんも、毎日「わからない」に出会っている。
そのたびに、調べたり、誰かに聞いたり、考えたりする。

未来も、たくさんの「わからない」を、大切にしてね。

お父さんへ——息子へ

この子の学びへの好奇心を守るために、お前ができることがある。

「なんで？」という問いを、大切に受け取ってあげてほしい。

全部に答えなくていい。
「おじいちゃんにも、よくわからないな。一緒に調べてみようか」

でもいい。
知らないことを知らないと言える大人の姿も、この子にとっては大事な学びになる。

父さんが６０歳で、まだ勉強している。
その父さんを見て育ったお前が、３４歳で副業で学んでいる。
そのお前を見て育った未来が、学ぶことを当たり前に思える大人になる。

学ぶ背中は、世代をまたいで続いていく。
そのバトンを、お前が受け取って、次に渡してくれると、父さんは嬉しい。

※ 次章：第９の手紙「誰かのために生きる」へ続く

第９の手紙　誰かのために生きる

人生の問い：人生の後半を、何に捧げるか？

【息子へ】
お前に、少し不思議な話をする。

６０歳になって、社労士として動き始めてから、お金の感覚が変わった。

会社員のころは、月給をもらうたびに「もう少し多ければ」と思っていた。どれだけ受け取っても、「十分だ」という感覚が、なかなか来なかった。

でも今は、相談者に「ありがとうございました、おかげで助かりました」と言われると、それだけで、何か満たされるものがある。

「受け取ること」と「与えること」では、満たされ方が、根本的に違うのだと思う。

受け取るだけでは、満たされないこと

会社員のころ、父さんは「受け取る側」にいることが多かった。

給料を受け取る。評価を受け取る。肩書きを受け取る。
定年を迎えて、それらが全部なくなったとき、空っぽになった感覚があった。
でも、社労士として動き始めて、立場が少し変わった。
「与える側」に立つことが増えた。

「ありがとう」という言葉が返ってきたとき、会社員のころには感

じたことのない充実感がある。

与える人と、受け取る人のこと

組織心理学者のアダム・グラントが書いた研究に、こんな考え方がある。

人を三つに分けることができる、という考え方だ。

まず受け取ることを考える「受け取る人」。まず与えることを考える「与える人」。そして、与えることと受け取ることのバランスを取る「折り合う人」。

短期的に見ると、受け取る人がうまくいくように見える。
でも長期的に見ると、与える人が最も成果を上げるという。

与え続けることで、信頼が積み重なる。信頼が積み重なると、人が集まってくる。人が集まってくると、情報が集まる。機会が集まる。助けが集まる。

父さんは、どちらだったか。
正直に言えば、受け取る人と折り合う人の間くらいだったと思う。

それが、６０歳になって少し変わった。
「まず相手に、何ができるか」から始めることを、意識するようになった。

与える喜び、支える喜び

父さんが今やっている仕事の中に、成年後見人という活動がある。

認知症や障害などで判断能力が衰えた方の、財産や権利を守る仕事だ。

地味な作業が多い。目立つ仕事でもない。報酬も、多くはない。
でも、この仕事をしていると、「この人の暮らしを守っている」という感覚が、静かに続いている。
「誰かの人生に、直接つながっている」という感触がある。
それが、父さんには新しかった。

３８年間の会社員生活でも、誰かの役に立っていたはずだ。でも、それはいくつもの層を介した「役に立ち方」だった。

今は、目の前の人に、直接つながっている。
その違いが、想像していたより大きかった。

次世代への責任について

お前は今、３４歳だ。
人生の後半を何に捧げるか、ということは、今すぐ決める必要はないと思っている。

でも、一つだけ考えてみてほしいことがある。
お前が今積んでいるものを、誰かに渡せる日が来る、ということだ。

大手企業でリーダーとして動いてきた経験。副業で試行錯誤してきた経験。失敗して、立て直してきた経験。
それらは、今は自分のためのものだ。でも、いつか「誰かのため」に使える日が来る。

そう思いながら積むものと、ただ積むものとでは、５年後、１０年後に、少し形が変わってくる気がしている。

父さんが６０歳から始めたこと

社労士として、精神的な理由で働くことが難しくなった方の、障害年金の相談に乗ることが多い。

制度の存在を知らないまま、苦しんでいる人がいる。知っていても、申請の仕方がわからず、諦めている人がいる。

「この制度で、少し楽になれます」と伝えられたとき。「ありがとう、やっと前に進めます」と言ってもらえたとき。
その瞬間に、３８年間の会社員生活の中で一度も感じなかった種類の手応えがある。

遅かったかもしれない。
でも、６０歳でこれに出会えたことを、今は良かったと思っている。

◆◆◆

おじいちゃん——父さんの父——は、商売を通じて、地域の人たちに何かを届け続けた人だった。

７４歳で会社を締めたとき、近所の人たちが何人も挨拶に来たと聞いた。
商売で得た利益ではなく、その言葉が、あの人の財産だったのかも

しれない。

誰かの役に立って生きること。
それが、最後に残るものなのかもしれない。

【未来へ、そして未来を育てる息子へ】

未来へ

未来は、誰かに「ありがとう」って言われたこと、あるかな？

嬉しかったんじゃないかな。
その気持ちを、覚えておいてほしい。

それが、今日の話の、全部だから。

もらうより、あげる方が嬉しい

おじいちゃんはね、最近気づいたことがある。

もらうよりも、あげる方が、なんか嬉しいことがある、ということだ。
「自分が、誰かを嬉しくさせた」という気持ちだよ。

それはね、ずっと心に残るんだ。

次の世代にバトンを渡す

おじいちゃんから、最後に一つだけ。

おじいちゃんは今、この本を書いている。
お前に渡したくて、書いている。
未来が大きくなって、「なんか大変だな」と思うことがあったとき。

「どうすればいいんだろう」と迷うことがあったとき。
この本を開いてほしい。
全部の答えは書いていない。でも、一緒に考えるヒントは、きっとある。

おじいちゃんは、未来の人生を全部は知らない。
でも、ずっと応援している。
それだけは、確かだよ。

お父さんへ——息子へ

最後に、未来の父親として読んでいるお前に伝えたい。

この子が「誰かのために動く」という経験を早くにできるかどうかは、お前が何を見せるかにかかっていると思う。

誰かを助けているお前の姿。感謝されて、照れくさそうにしているお前の姿。

難しいことは、何もいらない。
困っている人がいたら、手を差し伸べる。感謝されたら、素直に受け取る。
その小さな積み重ねを、この子の前でやり続けてくれたなら、それで十分だ。

「誰かのために生きることの喜び」は、言葉では教えられない。
生きている姿で、伝えるしかない。

父さんが６０歳でようやく気づいたことを、お前は３４歳で、もう

やっている。
それを、続けてくれ。
そして、この子にも渡してくれ。

※ 次章：終章「未来へのバトン」へ続く

終章　未来へのバトン

この手紙を書き終えた。

９通の手紙を書きながら、父さん自身が、一番多くのことを考えさせられた。

息子に伝えようとするたびに、自分の失敗が見えた。孫に語りかけようとするたびに、取り返せない時間が見えた。でも同時に、「まだここから始められる」という感覚も、書くたびに少しずつ強くなっていった。
これは、父さんにとっても、地図を描く作業だった。

孫の問い、もう一度

この本を書き始めるきっかけになった、孫・未来の言葉を覚えているだろうか。
「おじいちゃん、会社辞めたら、もう働かないの？」

あのとき父さんは「そうだね、ゆっくりするよ」と笑って答えた。
でも本当は、違った。

働く。まだまだ働く。ただ、今度は違う意味で。
給料のためではなく、評価のためでもなく、誰かの役に立てるということの手応えを、ようやく知ったから。

未来にはまだ、その意味はわからないだろう。
でも、おじいちゃんが６０歳から何かに向かって動いている姿を、どこかで見ていてくれたらいいと思っている。

「大人になっても、新しいことを始めていいんだ」
その感覚だけでも、伝わっていたなら十分だ。

息子へ、最後に

お前は今、３４歳だ。
この手紙を全部読んでくれたなら、父さんがずいぶん遠回りしてきた人間だということは、わかってくれたと思う。

３０歳で見つけた初志を、５８歳まで忘れていた。変化を怖がり続けた。失敗を避け続けた。選ぶことを先送りにし続けた。与えることより受け取ることを先に考えていた。

後悔していないと言えば、嘘になる。
でも、遠回りしたからこそ、見えたものもあると、今は思っている。
お前には、父さんと同じ遠回りをしてほしくない。でも、お前なりの遠回りは、あっていいと思っている。遠回りの中にこそ、その人だけの地図が生まれるから。

一つだけ頼みがある。

お前はお前の道を、お前のペースで歩いてくれ。
父さんの地図を、コピーしなくていい。
ただ、迷ったとき、分岐点に立ったとき、この手紙のどこかが、少しでも羅針盤になれたなら、書いた意味がある。

副業で試していること。リーダーとして積んでいる経験。誰かに届けようとしていること。

それは全部、お前だけの地図の線だ。

続けてくれ。

　未来へ、最後に

未来へ。

おじいちゃんからの手紙は、ここで終わる。
でも、お前の物語は、ここから始まる。

お前が１００歳になるころ、この手紙のことを覚えているかどうか、おじいちゃんにはわからない。もしかしたら、どこかの棚の奥に眠っているかもしれない。

でも、もし何かに迷ったとき、どこに向かえばいいかわからなくなったとき、この本を開いてみてほしい。

全部の答えは、ここにはない。
おじいちゃんにも、答えはわからなかったから。
でも、一緒に考えようとした痕跡は、ここにある。

ただ一つだけ、確かなことがある。
お前の人生は、お前のものだ。
誰かの地図を、なぞらなくていい。
お前だけの地図を、お前のペースで、描いていってくれ。

おじいちゃんは、ずっと応援している。

　四世代の地図、それぞれの形

父さんの父――８４歳のおじいちゃん――は、商売一筋で５０年を生きた。

父さんは、会社員として３８年を走り、６０歳から新しい地図を描き始めた。

お前は、会社員でありながら副業で新しい可能性を探し、３４歳でまだ地図の途中にいる。

未来は、４歳で、地図の最初のページをこれから書き始める。

四世代の地図は、それぞれ形が違う。
でも、一つだけ共通していることがある。
誰も、完成した地図を持っていなかった。
みんな、歩きながら描いてきた。
それが、人生というものだと、父さんは思っている。

バトンを渡す

父さんの父から、父さんへ。
父さんから、お前へ。
お前から、未来へ。
バトンは、世代をまたいで渡り続ける。

受け取ったバトンを、自分の色に塗り替えて、次に渡す。
それが、世代を超えて生きるということだと、父さんは思っている。

父さんが渡せるものは、完璧な答えではない。

遠回りの記録と、途中の地図と、一緒に考えようという気持ちだけだ。

でも、それで十分だと思っている。

お前はお前の道を。未来は未来の時代を。

それぞれの地図を描きながら、時々立ち止まって、確認し合おう。

「今、どのあたりにいる？」
「次は、どっちに行く？」
「一緒に、ここまで来たね」

そういう会話を、これからも続けていけたら、父さんは嬉しい。

２０２６年３月　　時代進（じだいすすむ）

本書を読んでくださった方へ

この手紙は、私が息子と孫に渡したくて書いたものです。でも、もしあなたの心にも何か届くものがあったなら、それは嬉しいことです。
あなたにも、渡したいバトンがあるはずです。渡したい相手がいるはずです。

まだ間に合います。
一緒に、地図を描きましょう。

人生の地図

四世代への手紙

発行日　2026年3月31日
著　者　時代進（じだいすすむ）
発行元　キャリア＆ライフデザイン研究所

©jidai-susumu
Published in Japan

本作品の全部または一部を無断で転載、複製、改竄、改変、翻訳、翻案、インターネット上に掲載すること、および有償無償に関わらず本データを第三者に譲渡することは法律により禁じられています。